

自主性を強くすると、主体性は弱くなる

2026・9・30 重枝 一郎

最近クラスの様子はどうですか？

私は、そりゃもうどうしていいかわからないくらいのクラスを預かることが多かった。学級が荒れないように、一日中、廊下に机を置いて、生徒を管理し続けたこともある。それも3年間（笑）。でも、多くのことをまわりの同僚に助けてもらった。特に副任の先生には、手が回らない事務作業や、自分が強く指導した生徒に対するフォローなど助けてもらった。

時々、「困ったときは言ってね」という言葉を聞く。でも私は、副任の先生に相談したという記憶がない。日頃の情報交換（雑談的）で、みんな感度を高めているから、勝手に先手的に動いてくれていたからだと思う。早い話、「自分たちの仲が良ければ、たいがいのことは大丈夫！」の法則である。

荒れているクラスの特徴の一つとして、結局先生一人が必死に頑張っているという状況がある。その状況を脱するために、どんなやり方をすればいいかにとらわれていると、おそらく何も変わらない。

これは、授業でも、クラス経営でも、部活指導でも同じことが言えるのだが、まず、現状を生徒と共有して、その危機感をもってどうするべきかを生徒から引き出しながら、何度も何度も確認することが肝要になる。「自分たちは〇年生としてどう見られているか」「クラスの一員としてどういう言動をしているか」、事実をみんなで確認して、危機感を高めなければ、生徒は真剣に考えない。ここがスタートになる。

その前提条件の上で、「何をするのか」を明確にしていく。例えば、授業であれば、ノートをきちんととるとのこと以前に、なぜ勉強するのか、なぜ仲間と一緒に取り組むのかという「なぜ」という土台作りをしなくてはならない。つまり、事実を見える化し、前提をそろえて、ゴールを共有するということである。

このようなプロセスをすることは他責思考を生まないと思う。自分で、自分たちで決めたという意識が「主体性」を育む。

言うまでもなく、「主体性の育成」をどの学校も目標としている。私も長年このことを最上位に置いていた。（校長研修だより6「主体的とは」）

組織や誰かがやって欲しいと思うことを自らやるのは「自主性」である。行く先まで自分で決めて自らやるのが「主体性」になる。自分で最初から考えてやったか、人から言われてやったかの違いである。もちろん両方大切だと思う。

しかし、普通に考えれば、「自主性」が強くなると、「主体性」が弱くなるということである。もしかしたら、「自主性」は言われたことだけやる人を育てているかもしれないし、指示ばかりだと、それ以外のことはできない人を育てていることになるのかもしれない。でも、多くの教師は、「主体性」ばかりを強くすると、何も行動しない人が増えるのを心配するのではないか。実は、そんなことはないのだが、とにかく行動をさせて、経験させたいと思って、「自主性」の先に「主体性」があると考える人もいると思う。以前の世の中だったらこれでもいいのかもしれない。

今の生徒は、「こういう時はどうしたらいいんですか」と聞く力も弱くなっている。聞く相手をもっていないかもしれない。そのコミュニケーション力を育てることも大切だが、自分で考えてまずやってみる癖をつけさせることがもっと大切な時代になっていると思う。それが「主体性」である。

私たちの学校では、どんなプロセスであろうが、何事も「主体性」につながる取組にしていこう。

【先生方へ】月曜の朝礼拝（校長講話）で話しましたが、生徒たちの「レジリエンス」を高めるために、たくさんほめて、たくさん叱ってください。校長が、それが大切って言っていたことを思い出させてください。